

---

# チートな俺とD×D

月影ミケ乱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートな俺とDxD

### 【Nコード】

N5112BA

### 【作者名】

月影ミケ乱

### 【あらすじ】

事故で死んで神と魔王にハイスクールDxDへと送られる、主人公「兵藤一誠」になって大奮闘！  
チート能力と赤龍帝を引っさげて大暴れ、どこまでいけるかこうご期待！

作者がアニメみて暴走的に書き出したものです、基本小説と漫画をベースにしています。

Life・00:プロローグ(前書き)

すみません、月影ミケ乱です

いや〜暴走して書いてしまいました

んじゃ〜ストーリーへ

## Life・00：プロローグ

知らない天井だ・・・

なんとテンプレな台詞を言ってしまった俺だがかなり混乱してる、なぜなら、さっきまで屋上から落ちたからだ、簡単にまとめるといじめ野郎を社会的致命症を与えてやったら、仕返しにリンチにされそうになった所で金網がはずれそのまま落ちたのだ、

(＊詳しくはチートな俺と異世界物語で)

そして死んだはずの俺がどうして何も無い真っ白な部屋にいるんだ？

「ふむ、こいつならいいかな？」

「そやな、こいつでええな」

後ろでなんか話してる人がいるらしいから振り向いてみると、そこには人(？)がいたのだ、俺をみて相談中みたいなのだ、人とはちよつと違うまるで二人は正反対な気を放ってる、ぶつちやけて言えば神と悪魔って感じがビンビンなのだ、顔も光つてたり暗かったりとまったく見えん、

「あゝ君は死んだことわかってるよね？」

神(？)らしきじいさんが聞いてくる、

俺も死んだはずなのにここにいてるって事はいきてるのか？

「理解してるみたいやな」

なんと心を読みやがったよこの悪魔（？）

「うむ、ところで私たちは今君が思ってるそのままだよ」

「訂正では神と魔王やけどな」

やっぱりか、でそんなお二人さんがなんの要なんだ？

「ある世界にとんでほしんよ、実際」

「君が生前読んでいた本やアニメ、漫画と言った世界なんだが、私たちはもう干渉が出来なくなっているのだ」

「その神がその世界の可能性を見ていたら、大変なことがおき  
な、

その世界の主人公が死ぬって言う世界が出来てしまつてな」

「私たちが出来る事といえば魂なら送って主人公に固定するくらい  
しかできないのだよ」

「そんで丁度お前が死んだからこの魂を使おうと思つたんや」

「なんとまゝかなりテンプレですね、送るだけですか？」

「それやけど一応向こうで死ぬからそのときに発動するようにする  
ぞ」

「つてもう一回しぬんかい！」

「そうだね、君は『ハイスクールD×D』って知っているかな？」

うむ、あの有名な小説だな、俺は好きで10巻全部もってるぞ、

「その世界の主人公『兵藤一誠』ひょうとういっせいになってもらおうってことや」

なんと、あの主人公にか!?

なるほど、それなら一度死んで悪魔になる必要があるな、でも少し不安だな、どうしたものか・・・

「そんな不安な顔せんでもいいぞ、なんせ特典は付きやからな」

「そうですね〜7個にしますか、ラッキーな感じでいいのでは?」

「そやな、それでいい」

そうなる何個か考えてあったのをまとめるか、いきなり頭をフルに回転させる、

それはもうなんていうか今まで勉強以外にフルに使うのは初めてかもしれない、

「おしつ!まず『努力すれば出来るようになる能力』、

『魔力、気、霊力、念、覇気をリミッター解除で使えるようにして』、

『Fateの「ゲイト・オブ・バビロン王の財宝」と「アンリミテッドフレードワークス無限の剣製」をえるように』、

『ネギま!のダイオラ魔法球、1時間を一週間にと年をとらないようにして』、

『身体精神知力のリミッター解除と耐久性向上を』

『魔眼On/off付きで代償無しに』

最後に『続きとか気になるからそれらの本やアニメを「ゲイト・オブ・バビロン王の財宝」に入れてくれ』」

「ふむ、それくらいならいいですよ」

「なかなか良い線を付くようにつけたもんや」

「そうですね、あゝ殆どのあなたが知りたい物はダイオラマ魔法球の中の書物庫に入れておきます」

「別名『無限書庫』やな、あと1と2と4と5は最初っから使えるようにしておくで」

「ありがとうございます」

「それでは今から送りますから」

「気張りや〜」

二人が俺に手をかざすと俺が光だす、自分の原型がなくなり球体になった、

意思はあるが前の俺の原型がなくなったのだ、言ってみれば魂だけの存在だ

そして目の前でいきなり暗転したのだった、

二人視点Side

送るのを見た二人はすこし安堵したようたため息をして、

「よかつたんか？あいつ・・・になれる逸材やんけ」

「いいのです、それには経験が必要と思いますから」

「せやな、さてワイらもいこうか？」

「そうですね、私たちも母なる闇へともどりますか」

「多分説教がまってるやろな」

「はい、素直に受けましょ」

「ワイはいやなんだがな」

そういうと二人は闇へと姿を消していった。

Side out

つづく



l i f e ・ 0 0 : プ ロ ロ ー グ ( 後 書 き )

次 回 : l i f e ・ 0 1 : 俺 は 兵 藤 一 誠 !

Life・01：俺は兵藤一誠！（前書き）

暴走はまだまだ続きます！

## Life・01：俺は兵藤一誠！

おっす！俺は兵藤一誠！

ってテンプレみたいな挨拶ですまないがあの転生から11年たつてる、

え？なんで11年も経ってるって？

だって良いじゃん殆ど鍛えるためにしか使ってた、

一応簡単にまとめると、

転生後5歳の時は少し混乱したが成れる事を優先した、

幼稚園に行っていたこの時にイリナと会った親の都合で分かれる、一応一緒に普通に遊びまわったりした。

小学校初期に入ると同時に勉強をする、本を何度も読んで覚える、基本的な体力をつけるべく朝夕に走りこみ、基礎的筋肉をつける。

中期に気を使う練習をするためにダイオラ魔法球（別名：別荘）を使った、

そこはアメリカ大陸と同じ大きさと巨大な城それらを管理する自動人形がいた、

もちろんネギま！茶々丸達だった、正確な人数はわからないが結構いた。

後期に覇気を覚えた、気と相性がいいので使い方を追求してみた、このとき悪ガキどもから女の子を助けたのは良いが覇気を使ったため全員気絶、

使うのに成れるまで一応封印、出来るだけ練習してコントロールで

きるようになる。

中学に入ると同時に茶や丸と模擬戦を何度もしていた、茶々丸のレベルは一応俺が知ってるくらいの強さを武器を使わない格闘オンリーであった、

武器の扱いも一応練習することになった、基礎だけを繰り返す、

共学化した「駒王学園高等部」に入学、一応普通に受かるほどの学力をもっていた、

つてか一誠の特徴でスケベなのだって言うけど駒王に入ろうとする時のレベルはすごいものだった、

一応茶々丸に勉強教えてもらったりもしたから学力的には大学までいけてしまう、

本当に『努力すれば出来るようになる能力』のおかげだ、

つとま〜今にいたるんだが、一応高等部2年になった、

学園をエンジョイしているのもあった、なぜか俺の周りには馬鹿二人がいた、

メガネを掛けた真性のロリコンこと元浜と坊主頭のエロガキこと松田、

あ〜こいつらの性で俺の大切な人生の半分は台無しになりつつある、見てる分には面白いんだけどね、女の子があまり良い顔しないのだ、

「よっ！心の友よ！」

松田が俺に挨拶しながら来る、

「今回の新作のエロDVDをもって来たぞ、貸してやるよ」

デカイ声で言い終わった瞬間俺らに冷たい視線が突き刺さる、マジ

痛いっす、

俺は肘鉄で松田のおなかを殴りくの字になったところを頭をつかみ机に叩きつける、

「松田！声がでかいわ！」

手加減して殴つてあるためうめく程度だった、その松田の頭を抑えて近づくやつがいた、

「いや〜今日はいい風が吹いていたよ、そして満開な花が咲いていたよ、パンチラと言う花が」

「かつこつけながら言う台詞かエロメガネ！？眼鏡割るぞ！」

元浜は平然としてかつこつけてるが黙っていれば多分かつこいいのにコイツは自分の信念に忠実だ、

こんなのが友達とは俺もすごく頭痛がする、ま〜エロは好きだが、そうしてると女子達がまた悪口を言い出しエロ猿こと松田が暴れる、俺は有無を言わず暴れる松田を殴り倒す、すまないと手であやまると松田の席に戻しておく、

元浜は松田が持つてきてたDVDをみていたのだ、元浜も同じように殴つてから席に戻しておく、

俺はある意味被害者でもある、二人が一緒に俺も悪いみたいな感じに、

それでもクラスの女子はそうでもないらしい、元浜と松田の二人のストッパーとなってるからだと思う、

ま〜主に松田の暴走時に俺が鉄拳制裁をしてとめたりしてるから怖がれてるのはあるかもしれん、先生が来て授業が始まった。

今は昼休み、俺はあの二人とは別行動で旧校舎と新校舎の間の森に  
いる、

誰もいないのを見回してからゆっくりと息を吐く、森のざわめきや  
遠くの人の声が聞こえなくなっていく、

今やってるのは念をつかった練習だ、纏・絶・練・発を何回も繰り返して  
返してから今度は練を続ける堅をする、

堅の持続時間は最初は1時間も持たなかったが今じゃ5時間くらい  
やれるようになってた、

今は昼休みだからそんなに長く出来ないのですばやく出来るだけを  
心がけている、

そこから応用をしていくとき円を広げてたら俺を見てる人がいるの  
がわかった、

気配からして人かっつて言うのはわからないけどなんとなく見ている  
つてのがわかったからだ、

だからゆっくりと落ち着けると感じたほうに顔を向けて軽く見つめ  
る、

そして振り返ってゆっくりと新校舎の方へと向かう。

??? Side

はじめはなんか変な気配を感じたので見に行くことにした、

そこには男の子が一人たっていたのを見つけた、

こんなところに男子がいるのがおかしいと思った、普通の男子は女  
子のことを見つめてることが多いからだ、

しかしあの子は人気のないところで何をしてるのかっていうとただ  
立っていた、

ふっといきなり存在が消えるような錯覚を感じその跡に爆発的な存

在を感じた、

まるで電気をOn/offしたみたいなきげが目の前で起きていたのだ、

そのあと爆発的に存在がつづくとすぐに普通に戻った、

つとそのとき私の皮膚に静電気みたいな感じがしたのだ、

まるで全身を見られてるみたいに感じて周りを見回すけど彼以外誰もない、

再び彼を見たらこっちに顔を向けてる、睨んだりしてるわけでもない唯見つめられた感じだった、

私は旋律をおぼえたと同時に彼に興味が沸いたのだ、

「部長？どうかしましたか？」

後ろを振り向くと旧校舎から来た姫島朱乃がいた、そんな朱乃に私は笑みを浮かべて

「朱乃、私いい子見つけたみたい」

「あらあら、部長のお眼鏡にかかった人がいたのかしら？」

「ええ、もしかするといい下僕になるかもしれないわ」

「それはたのしみですわ」

「一応調べておく必要があるわね、彼の服装から見て2年くらいかしら、」

うふふふっ 楽しくなりそだわ、

その男子が行った方向をみて私は面白そうに笑っていた。

Side Out

U  
U  
<



l i f e ・ 0 1 : 俺は兵藤一誠！ (後書き)

ミケ乱です

まだまだ続きます

では次回「l i f e ・ 0 2 : 人間、やめました。」

l i f e ・ 0 2 : 人間、やめました。 1 (前書き)

まだ暴走してます、たまに原動力ですね暴走ってW

では続きをW

あの日から数日がたった、  
あの時俺を見てたのは多分グレモリー家の誰かだな、  
まゝ相手からのアクションは俺の調査くらいだろう、  
多分平均な成績をみてなにかあると思つて監視もしてるみたいだし、  
使い魔とかあのイケメン君も使つて、

つとそういえば昨日告白された、もちろんあの天野夕麻からだ、  
一応初心な感じでOKをだして明日あたりにデートするつもりだ、  
松田と元浜はある意味暴走、そして俺の鉄拳で夢の国へといざなつ  
てやった、

俺は普通に行っているけど相手は俺を見定めているのだろう、  
時折俺を観察するみたいに見ているからだ、  
写真とか音声を録画して一応『別荘《ダイオラマ魔法球》』に隠し  
ておく、

さて明日一度しぬ、まゝ綺麗なお姉さんの胸で死ぬならいいけど、  
相手は俺のことを虫けらくらいしか思つてないだろう、  
夜中に一応『別荘《ダイオラマ魔法球》』に入つて茶々丸の相手を  
してもらつてる、

『無限書庫』は半端な量の本やら魔道書もあつたけど、  
驚いたことにあの某最強弟子の『秋雨流弟子一号強化プログラム  
初級編』つてのがあつた、  
まさかこつてある意味アーカイブとつながつてるのかな？と疑る  
ほどだった、

ちなみにそのプログラムは実践してる、無駄な筋肉をつけないよう  
に引き締めた体をしてる、

実際やつてみるとすごいきついがいい感じだった、流石哲学する柔  
術家

つてなわけで次の日

駅前で待ち合わせをする俺に紙を渡してくる女の子がいる、あゝテンプレなやつだ、

とにかくその紙をポケットにしまつと夕麻ちゃんが来たのだ、

まゝここまできたら度胸だ、一応楽しむつもりでいる、

映画にウィンドショッピング、その後食事をしてゆっくりと歩いてると、

公園が見えてくる、普段誰も使うことが無い公園だ、

人気もない、なるほど人払いの魔法か結界だろう、

完全じゃないが一応魔眼が使える、凝の応用で見るのだから、

噴水のあたりまで来たとき夕麻ちゃんが俺の方を振り向いて、

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい？夕麻ちゃん」

「ひとつ私のお願い聞いてくれる？」

「お願いってなにかな？」

「死んでくれないかな？」

すこし驚いてみせてからゆっくりとほほをかきながら、

「あれ ゴメン・・・もう一度いつてくれないかな？」

「死んで・・・くれないかな？」

夕麻ちゃんの背中から黒い翼が出てくる、墮天使の証である黒い翼、

「あなたと過ごしたわずかな日々、楽しかったわ」

夕麻ちゃんの手に光が収束していき一本の槍状になった、

それをつかむといきなり投げつけてきた、早いよけれないわけではないが、

これをうけないといけない、一応これを受けて悪魔になるしかない、  
衝撃とともに腹をその光の槍が貫く、まず痛みで全身が痙攣してしまっ、

「ぐっ!!!」

光の槍が消えるのとどばつと血が出てくる、口からも血を吐き鉄の味  
しかなかった、

ひざを突いて夕麻をみつめる、

「ごめんね、あなたが危険因子だったから早めに始末させてもらっ  
たわ」

テンプレご苦労さん、一応なげつて顔をむけておく、

「恨むならその身に神器セイクリッドギアを宿らせた神様を恨んで頂戴ね、じゃあね  
」

その場から夕麻が消えると俺はどつと倒れる、2度目だが死ぬ気で  
呼んでみるか、

手に付いた血をみて、あの赤い髪的美少女を思い浮かべた、  
今ある魂の力を振り絞り願いかける、悪魔でもいいからと

目の前が赤く光を発光させるとあの真っ赤な髪をした人が現れた、

「あなたね、私を呼んだのは？」

うつろになりつつある意識で聞こえてきたその人を見つめてる、

「へえ・・・おもしろい事になってるじゃない」

俺の事を見つめるその人みはなんとなく嬉しそうな感じだ、

「ふふふっ・・・あなたがねえ」

たぶん俺の中の見極めたんだろう、意識がほぼ無くなりかけて眼がかすむ、

「いいわ、あなたの命私が拾ってあげる、だから・・・」

私のために生きなさい

それを聞いたのを最後に暗闇に意識がおちたのだった。

\* - \* - \* - \*

『起きてください、起きてくれないと殺しちゃうよ』

俺はちよいヤンデレ風が目覚ましで起きた、うっこの目覚ましはちよつと失敗かな、

デジタルでしかも毎回違う女の子の声で起こしてくれる面白いって買って買ったが、

今日の目覚めには災厄だった、

「うっ日差しがいたい」

どうやらちゃんと悪魔になったのを確認できた、ただ日の光が痛いくらいだ、

よし気合入れていくか、制服に着替えてゆっくりと学校へとむかう。

つづく

l i f e ・ 0 2 : 人間、やめました。 1 (後書き)

ミケ乱です、たった1日で書き込んだ物です、

下手するところちがメインになりそう・・・w

ちまにまだ続きます

次回「l i f e ・ 0 3 : 人間、やめました。 2」

P S : サブタイトルは基本同じ感じにw



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5112ba/>

---

チートな俺とD×D

2012年1月14日09時46分発行